

プログラム・ノート

寺西基之

ドヴォルジャーク：テルツェット ハ長調 作品74 より 第1楽章、第3楽章

ボヘミアの国民的な作曲家アントニン・ドヴォルジャーク(1841～1904)が円熟期に入りつつあった1887年にヴァイオリン2つとヴィオラという編成のために書いたこの作品は、いかにも彼らしい親しみやすいロマン的な味わいとボヘミア的な香りに満ちた名品である。4つの楽章からなるが、今日は甘美な叙情と活発な動きが交錯する**第1楽章**(イントロドゥツィオーネ：アレグロ・マ・ノン・トロppo)と、ボヘミアの民俗舞曲の特徴を生かした**第3楽章**(スケルツォ：ヴィヴァーチェ)が取り上げられる。

モーツァルト：クラリネット五重奏曲 イ長調 K. 581 より 第2楽章

クラリネットは18世紀後半に普及するようになった比較的歴史の新しい楽器だが、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756～91)は後半生のウィーン時代にこの楽器の美質を生かした作品を多く作り出した。その背景には名クラリネット奏者シュタードラーの存在があった。中でも後期の1789年に書かれた五重奏曲はとりわけ名品で、クラリネットと4つの弦楽器の密接な絡みが奥深い澄んだ響きを生み出している。特にクラリネットの表情豊かな歌が印象的な**第2楽章**(ラルゲット)の叙情美はまさに格別で、後期のモーツァルトの円熟した筆遣いが如実に現れている。

ラヴェル：ヴァイオリンとチェロのためのソナタ より 第1楽章、第2楽章

1920年にパリの音楽誌がドビュッシー追悼特集のために当時の代表的な作曲家に小品の作曲を依頼した。モーリス・ラヴェル(1875～1937)ももちろんそのための曲を書いたが、その後それを第1楽章とし、さらに3つの楽章を加えてこのヴァイオリンとチェロのためのソナタを1922年に書き上げる。彼自身によれば「極端なまでに音楽を裸形化」したソナタで、2つの楽器の衝突や緊張関係を際立たせることが意図されている。今日は最初の2つの楽章が演奏されるが、**第1楽章**(アレグロ)での2つの楽器の旋律線が織り成す綾や、ピッツィカートで始まる**第2楽章**(トレ・ヴィフ=きわめて生き生きと)での荒々しい激しさにそうした特質がよく現れている。

フランセ：クラリネット五重奏曲 変口長調 より 第3楽章

20世紀フランスの作曲家ジャン・フランセ(1912～97)は新古典的なスタイルと明快な形式のうちに気の利いたエスプリと鋭いセンスを生かした作風で知られ、洗

練された書法のうちに軽妙洒脱な性格を生き生きと打ち出した作品を多数残した。1977年に書かれたクラリネット五重奏曲もおよそ現代音楽の潮流とは掛け離れた古典的な明快さとウィットに富む楽しい楽想に満ちた彼らしい作品だ。もっとも本日演奏される**第3楽章**(グラエヴェ)はシリアスな趣の緩徐楽章で、ヴィオラの楽想に他の楽器が応えるといった応唱風のやりとりで始まり、全体が内省的な気分覆われている。

ドホナーニ：弦楽三重奏のためのセレナーデ ハ長調 作品10 より 第1楽章、 第2楽章、第3楽章

リスト以降の最高のハンガリー人ピアニストとして知られたエルネー・ドホナーニ(1877～1960)は、作曲家としても様々な作品を残した。ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロのための「セレナーデ」は初期の1902年頃の作で、後期ロマン派の影響が色濃い作品だ。全5楽章からなり、本日は最初の3つの楽章が演奏される。**第1楽章**(行進曲：アレグロ)は活気に満ち、その主題は全曲の幾つかの主題と素材的に関連する。**第2楽章**(ロマンツァ：アダージョ・ノン・トロツポ、クアジ・アンダンテ)はピッツィカート上に息の長い主題が歌われる主部と情熱的な中間部からなる。**第3楽章**(スケルツォ：ヴィヴァーチェ)はフーガ書法を取り入れた動的な楽章である。

ブラームス：クラリネット五重奏曲 口短調 作品115 より 第2楽章

ブラームス(1833～97)は晩秋期の一時期、孤独に苛まれて創作意欲を失うが、名クラリネット奏者リヒャルト・ミュールフェルト(1856～1907)の演奏を聴いて創作力を蘇らせ、クラリネットを中心とする室内楽作品を4曲生み出す。中でも1891年に書かれた五重奏曲は規模が大きく、弦楽器との有機的な絡みのうちにクラリネットの広い音域と音色の特性を生かしつつ、円熟した筆遣いで当時のブラームスの諦観と内なる情熱を表し出した傑作となっている。特に本日演奏される**第2楽章**(アダージョ～ピウ・レント)は彼の内面的な心情を綴ったような緩徐楽章で、弱音器を付けた弦の伴奏上でクラリネットが憧憬と孤独感を感じさせる旋律を歌い、さらに中間部ではジプシー風の旋律が即興的に奏でられる。